
グット バット ゲーム

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グット バット ゲーム

【Nコード】

N9705X

【作者名】

零夜

【あらすじ】

僕は、最悪なゲーム世界のバトルに巻き込まれてしまった。どうも僕には、特別な力があるらしい。僕には、わからない。

ゲームシステム

バーチャルリアリティ。

つまり、仮想現実。

が可能になったこの世界。

流行中のゲームがあった。それが、

グットバットゲーム武器も進化したこの時代で、

デリートされるプレイヤーがいるのは、珍しいことでは、ない。

僕は、そのゲーム世界に。巻き込まれてしまった。

僕の名前は、紙波 雄太。

ユーザネームは、ヤウト・ヤウトレザー。

どうして、こんな名前が付けられたのかは、僕には、わからない。

けど。先生は、知っていた。

そう。グットバットスクールの先生だ。

僕は、そのスクールに通う。内気な少年・自分で認めている。

バーチャルオン。(前書き)

いつものようにスクールに行く僕、
けど、いきなり敵が襲ってきて。何人が失う。
最初から大きな戦いが待っていた。

バーチャルオン。

紙波 雄太「はあ疲れた。僕のうちから遠いよここ。」
なんとなく教室にはいった。

先生「やあ、みんな。今日は、一人一人のスキルについて授業だ。」

雄太「聊か面倒な授業ですねw」

先生「おいおい。紙波。今日の午後、なにがあるかしってる?」

雄太「午後?なにがあるんですか?」

生徒達「えええ?あいつしらねえの?おいおい大丈夫かよ。」

「そう。合流戦。相手は、あの。Fエリア都市の。マキミズナド
オル学園。」

あそこは、殺しをめいんにした戦術。」

雄太「君。だれ?」

「私?私は、早乙女 香奈鏝。ユーザー名マベロツテ アスク。貴
方の仲間。」

よろしく」

「僕は、紙波 雄太。ユーザー名。ヤウトレザーです」
互いの名を名乗ることで。認証可能となる

このシステム。イグニシングルシステム。と言うらしい。

「君が。雄太君ですね?僕は、緑山 稼因。ユーザ名は、カリフォ
ウル フォースト。」

よろしくお願いします。足手まといは、嫌いですからね?」

先生「うむ。では、認証完了のようだな。バトルに備えておいてく
れ。それと。雄太、

君は、不思議な力を持っているようだね」

バーチャルオン。(後書き)

そんなこんなで。バトルすることになったそうぞ。

その戦いは、苦しいものか？はたまた楽な物か？

次回、バーチャルオン(続編) 戦術が勝利への近道。

交流戦。(前書き)

合流戦、または、交流戦。または、大量犠牲をだした戦い。呼びかたは、たくさんある。

けど。その時の犠牲たちは、もう・帰ってこないのだ。

交流戦

先生「君には、最初の武器。ダブルレザースhotsを与える」

雄太「ダブル．．レザー？」

先生「君にししか使えない武器さ。どうも君は、とんでもない。レザースキルを持っているようだね？」

雄太「はい。」香奈鏝「それをいかして．．今回の目的を手に入れて。あれがあれば、私たちは、強くなれる」

雄太「目的？あれ？つて、なんですか？」

稼因「おそらく。P U A I レザースナイプ。のことだろう」

先生「うむ。あれは、人を選ぶ。」

雄太「僕にそれを、とれと？無理だよそんなの！！大体、戦うつて時点で無理だよ！！」

怖いよ！！そんな強い所と当たろうだなんて。」

香奈鏝「怖いのは、同じ．．大丈夫。その時は、私が守る。」

雄太「顔。赤いよ？どうしたんですか？」

稼因「出たよ。急サイン。なるべく気づいてあげろよ？僕は、興味ありませんから」

あれあれ？そろそろ。時間ですよ？スクールの皆さん？

突然校庭から。おそらくメガホンであろうものを使った。

先生「君たちは、マキミズナドオル．．」

「そう。私が委員長。製襦 瀬名。ユーザ名。リバリー リカウド。

さあ、ヤウトレザーは、一人で出てきなさい。」

雄太「ちっ．．」

香奈鏝&稼因「断る」

製襦 瀬名「そうですか．．ですつてよ。学級委員。愈井美 浩一郎。」

愈井美 浩一郎「いま紹介を受けたものだ。ユーザ名。カリフォ

ウリ リマージュ。だ。

いるだろ？カリフォルニア フォースト。」

稼因「貴様は、僕が倒す。リマージュ」

愈井美「楽しみにしてるよ。エリート」

先生「さて、もういいかな？」

瀬名「いいでしょう」

先生「バーチャルオン！！」

瞬間、校庭が光ったかと思うと。

大都市にいる。

先生「ここが、大都市だ。まあ、ファーストステージかな」

ヤウト「じゃあ多分、普通呼ぶんじゃないかと聞か
えないんだね。アスク」

アスク「そうね．．．ここでは、ユーザ名以外で、よんでも聞こえな
いわ。ところで。フォーストは、？」

フォースト「僕なら、相手の学級委員を尾行中だ。少しむかつと来
る奴だからね。」

アスク「一人で。グイグイすすまないで．．．」

フォースト「心配には、及ばない。なあーに。すぐ帰るさ。これよ
り。戦闘フェイズに入るため。」

無線をきるぞ？」

「ピッ」

先生「それと、ヤウト。もしもの時は、マルチセレクトを利用しろ。」

ヤウト「マルチセレクト？あの武器の一瞬転送ですか？」

アスク「そう、一瞬転送。それは、勝ちを意味するもの。でも．．
この子、そんなに武器使えないんじゃない」

先生「いや、問題ない」

アスク「相手の能力、冷静さを。EGを使ってウイルスを送り込み
ます．．．くはあうっ！」

先生「大丈夫か？俺がやろう．．．グッアアアアア！！まずい。

相手に築かれてる」

ヤウト「もしかすると．．．脳波ですか？」

先生「そうだ。だがな、危険なわざで。神経崩壊もする。ハイパルEGがあれば」

ヤウト「僕がやります」

先生「止めなさいっ今の君には、」

アスク「わかったわ。」

先生「アスク!!!」

アスク「自分からやるといふ。それは、自分の強さです。ヤウトの強さは誰にも．．．奪う権利がありません」

ヤウト「敵の数。およそ。35．敵のスキル。ミサイル。ウイル
スを送り込んでくる。」

これが相手の神経か．．．捻じ曲げる。」

「ググググググググ」

相手生徒「ガアアアアア!!!痛い痛い!!!」

リバリ「うっ!!!ああああああ!!!クツ．．．今のでHPが半分。やるわね」

ヤウト「ふう。相手の神経、少し崩壊させておきましたよ?」

先生「うわあ．．．恐ろしいことするな」

アスク「可愛い顔をしていて。恐ろしいことをする．．．うは／／
かっこいい．．．かも／／」

先生「アスク?いったい何を?」

アスク「うっ。いえ、なにも。それより先生。私たち一回二人で」

先生「駄目です貴方の考えてることくらいわかるよ。」

アスク「シユン．．．ヤウト．．．」

ヤウト「う、うわあ!!!何ですか?こんな昼間から／／」

アスク「現実世界では、夜中二時。問題ない／／」

ヤウト「戦闘がおわってからでしょ?」

こわいよこの人。いきなりひょだよ;

何考えてるんだろう;

アスク「帰ってから．．うん。」

先生「あのう。これ、そう言うジャンルじゃないんですけど?」

アスク「ごめんなさい」

相手生徒「おらっ!!」

ヤウト「敵!!レーザーショット!!」

「ビシユン!!」

相手生徒「クッ．．」

ヤウト「デリートEG開始」

相手「ああああ!!」

相手は、のどから大量の血を吐き出し。

死ぬ

ヤウト「．．．こんなこと。」

先生「やるしかないんだ」

アスク「グロテスク．．嫌いじゃない」

ヤウト「えっ?．．じゃあすきってこと?」

アスク「ふふふ．．」

ヤウト「先生．．」

先生「そう言う奴だ。許してやれ」

ヤウト「は、はい」

アスク．．

貴方は、なに趣味なんでしょう;

僕は、怖いです><;

つづく

交流戦 (後書き)

いよいよ。戦闘を開始したヤウト。

そして、アスク；

アスク「グロテスク．．くふふ。」

そんな静かに笑わないでください；

と言う訳で次回へつづく！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9705x/>

グット バット ゲーム

2011年10月28日02時12分発行